

宮崎の南北

小牧實繁

はしがき

本稿は昭和九年十月末、京都帝國大學文學部地理學教室二回生諸君と共に飛騨國高山附近に試みた見學旅行の際、筆者自ら行つた實地調査に於ける聞見を中心として纏めたものである。この調査に於いても筆者の興味中心主義が多分に發現したのために本稿に誌すところが果して世の地理學者乃至は地理學愛好家の關心を有せらるるところに合致するや否や大いに疑はしいが、若し同好の士に對して何等かの資料を供することゝもならば筆者の幸之れに過ぐるものはない。一瞥の榮を賜はらんとする高雅の士は何卒五萬分一地形圖「高山」「船津」「御嶽山」の三圖幅を参照せられんことを乞ふ。

題して「宮崎の南北」といふけれども固より峠の南北兩斜面の余地域に亘つて調査を完了した譯ではない。北に於いては宮川の谷のほんの一部、南に於いても又小坂川の谷のほんの一部を調査し得たに過ぎないのである。また「宮崎の南北」といふけれども本稿に於いては必ずしもその兩者を比較對照せしめようとはしてゐない。寧ろ宮崎の南北の部分的地域に

於いて觀察した諸事象をありの儘に記述したに過ぎないのである。この點豫め讀者の御了解を得て置かなければならない。以下先づ宮川の谷の一部に就いて、次いで小坂川の谷の一部に就いて、必ずしも狹義の地理的事象にとは限らず眼に視、耳から聽き得た若干の事實に就いて、そこはかとなく書き誌して行かう。

一、宮川の谷

高山の南方大名田の在では雪袴ユキカマの外に信州袴といふのが用ひられてゐる。信州の方から輸入せられたものであらう。

米が不足で（一宮の清水のため水が冷いので米が出来ぬと村の人達は言ふ）一割は麥を入れて食べてゐる。食物に關係して、枋ウツギの木や朴ホトトギスの木や葉を乾して結飯ムスビイを包んだり薄板ウツギの代りに味噌を載せたり魚を焼いて載せたりするに用ひ

てゐる。柄の葉が乾されてゐるのを見て新來者は煙草の葉でも乾されてゐるのではないかと思ふであらう。

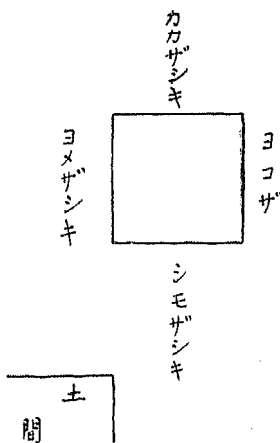
勞働には、手頸にテ、オ、ヒを着け脛にガ、マ、ハ、バ、キを着け、普通はワラヂを穿くが雪の時にはス、ク、ベで足を包みワラヂを穿くのである。雪時には山ではカンジキを着ける。雨の時はバンドリを着るが、バンドリはワラニゴ(藁の先の方)及びシナ皮を、黒く染めた麻で編んで作る。田圃の作業の時など夏の日の熱さを避けるためには背にコモを當てる。

運搬具としては、背に負ふ籠をコ、ザといひ負細のことを荷繩ヒナといふ。荷物は背にミ、ノを當ててその上に負ふ。ミノの代りにサンダハラを用ひることもある。ウマヤゴエなどを運ぶにはセ、タを用ひ、セタの下にも矢張りミノまたはサンダハラを當てる。冬、雪のある時など薪その他を運ぶには木製の櫓ソリを用ひ、櫓には箱を着けたものもある。一寸した小さなものを入れる

にはア、ジ、カが用ひられる。江州などのテゴ若しくはテンゴに當るもので、櫓の木または竹などをへぎて作り、腰に着けるのである。これを木の箱で作つたものは箱アジカである。

冬の生活は爐邊の生活であるが、圍爐裡の上は多くはツ、シ、ゴになつてをり(ツシゴは煙を通すため簀で作られてゐると土地の人達は言ふ)ツシゴの下に冬はソ、ラ、カ、ギ、からアマを吊しハ、バ、キなどを乾すに用ひそれからカギヅル(自在)を吊す。主人の席はヨ、コ、ザでありその向つて左、土間に近い方がシ、モ、ザ、シ、キ、向つて右がカ、カ、ザ、シ、キ、正面がヨ、メ、ザ、シ、キであり、カカザシキに

第一圖



は老人なども座る。即ち第一圖に示すが如くである。

炊事道具などの洗場を大名田ではユウ、スキと言つてゐる。用水の訛であらう。或ひは湧水の訛であるか。後の考を俟つ。

馬小屋のことをマヤと言ふ。田耕その他に馬を使役するが、馬は牝馬が多く、博勞が持つてくるのであつて普通五年乃至十年は置く。

平地のことをダヒラといふやうである。

高山の東北、大八賀村松の木では人々矢張り雪袴を穿く。

運搬用には多く馬を使役するが、農耕には多く牛が使役せられ、全體として馬よりも牛を飼育するものが多い。牛は牡牛が多く、朝日村（木曾街道）の方から來るが、買ひに行くものもあり博勞が持つて來ることもあり色々である。普通當歳で來て二、三歳で賣る。肉牛となるのである。

珍らしい作物としては油荳アブラエが畑に作られ（乾

して油をとる）また家々一位の庭木を有するものが少くない。またカハラ松（フジ松とも言ふ）があり、この松は冬葉が落ちると言ふ。

大八賀村に大洞オホイロの地があり地名學的の興味を唆るがその氏神は白山神社である。

丹生川村町方には村社御崎神社がある。由緒書によると祭神は積羽八重事代主神、大國主神の御子で御母は神屋楯比賣命、宮中賢所八神の一であり、猿田彦神を配祀し、別に無格社熊野神社を合祀してゐる。大字坊方丹生川神社に旅所がある。

坊方に於いては靱摺りに水車を利用してゐるのが見られる。また氏神丹生川神社の鳥居の脇には水車を利用してベルトを廻しその動力で臼を廻轉し稻をこく家がある。（水車で製材をやる家も一軒見られる）

米を搗く小屋をツキヤと言ふ。動力は多くはバツタリで、一軒の家で持ち税はかからない。この外にミヅグルマを動力とするツキヤ若しく

は、ヒ、キヤと稱すべきものがあり、米を搗いたり粉を挽いたり又前述の如く粃を挽いたりしてゐる。これも多くは一軒の家で持ち、他人の米を搗いてやる場合には賃金をとる。米一俵は四斗であるが、それ(一俵)を搗くに二〇―二五錢とる。粉挽き(米の粉が主)には一斗につき一〇錢粃挽きには一俵(粃は五斗一俵)につき一五錢とる。但しミヅグルマを有するツキヤには一年約二〇錢の税がかかる。(二度に分納する) バッタリは木を箕形に刳つたもので、江州の山村でガッタリと稱するものと大同小異である。バッタリはガッタリと同様その筧から落ちる水が箕に充ちた瞬間、ガッタリ乃至はバッタリと下轉するところから名づけられたものに違ひない。箕がバッタリと落ちる間に軸の反對側の杵が上がり、箕が落ちて中の水が空けられた瞬間杵が落ちて米を搗くことになるのである。

坊方は農を主とし、山では少しく炭(黒炭)が焼けるがそれは僅かなものである。

耕作には馬を使役するが坊方には牛も少しはゐる。但し馬の方が牛より多い。牛は此の邊で産ますのである。肥料には大體クサゴエとマヤゴエと金肥とを用ひる。クサゴエは山から刈りばなしのもの、マヤゴエは牛馬に踏ませたものである。田圃にクサニゴやワラニゴが見られる。前者は山の斜面の草を刈つてハサギ(中心の棒)の周圍に積んだもので、乾かされてやがてクサゴエとせられるもの、後者は繩やワラヂに利用した残りの藁をハサギの周圍に積んだもので、これを厩で牛馬に踏ませマヤゴエとするのである。

刈取つた稻はハサに懸けて乾す。ハサと云ひ稻木とは云はない。板倉イタクラの西北の面にハサを作り、それに稻を乾してゐる例を見るが多くはない。クラに雨の當らぬやう、また稻に雨が當らぬやうにするもので、以前はこの例は多かつたが、火の要慎が悪いといふので今は少くなつたと言ふ。

豆はこの邊でも蒔かれるのではなく植ゑられるのであること川口孫治郎氏が「飛驒の鳥」のうち記された如くで、豆は相當多く作られるが、それもハサに懸けて乾すのである。

養蠶も行はれるが、桑は多くは奥州桑と呼ばれる老桑である。

猪の農作物に對する害は全然ない。猪は五六十年も以前は川の奥の方に少しは出たが今は全然出ない。

家の母屋もさうであるが、農具などを入れる物置小屋も屋根は栗の板で葺かれてゐる。それを石で抑へてゐるのであるが此の石を屋根石またはオサ、ヘインと稱してゐる。栗には早く實るワセ栗(夏栗)と霜が來て初めて實る霜ぐりとがある。物置小屋、板倉の外に土藏があるがこれはツチグ、ラ、或ひはドゾグ、ラと呼ばれる。土藏も屋根は板葺である。

因みに此の谷の村では建物は殆んど凡てが板葺で、庇が長く廣く瑞西の山の家を髣髴せしめ

る。少くとも建築に關する限り、最もよく瑞西山村の景觀を展開せしめてゐるところは吾が國に於いては飛驒の山村であると思ふ。而して此の土地に於いても近來何軒かの家が新築せられ乃至は改築せられたのを見るが、所謂淺薄な文化住宅式の認められるものはなく、何れも舊來の形式乃至は規矩を踏襲して板葺を保存してゐるのであつて吾々國粹派も大いに意を強くするに足る。飛驒は筆者が最も愛好する國の一つである。尤も板葺と言つても凡てが板葺であるのではなく、小屋の屋根などに萱を用ひてゐるものもあるにはあるがそれも美的見地からして決して悪いものではない。飛驒に木の多いことと板葺が卓越することとの間には必然的な關係があることは明かであらうが、なほ雪との關係なども考へらるべきであるかも知れぬ。因みに此の邊では雪は普通七、八尺であるといふ。而して一時に二尺といへば大雪であるといふ。

川にはイハナがゐるが、鮎も鱒もゐないとい

よ。

山の神は荒神であるといひ、野神はない。氏神は村社丹生川神社である。

丹生川村大字大谷字漆洞に村社日輪宮ニチリンノミヤがある。天照皇大神を祀り稻荷、天満、荒神を合祀する。荒神の祭神は齋火武主比神、奥津日子神、奥津比賣神である。

昔は此の邊では附近に産する石灰を焼いて田にかけた由で、今もその小規模な竈が残つてゐる。また石灰は今も焼いて田にかけると言ふ。

小野には村社伊太祁會神社イタキキがある。そしてこれより尙上流に十一社の伊太祁會神社があるといふ。根方の氏神も村社伊太祁會神社である。この小八賀川の谷が古來一つの纏つた文化圏をなしてゐたらうことがかうした事實からも想像せられる。

小野より下流地方では米は三分二は餘るが、それより上流では米は不足であり、村では便宜小野より下流を平坦部と稱してゐる。この事實

からして小野より上流の伊太祁會神社文化圏は山村的な文化圏であつたらうと考へられる。

根方には岐阜縣委託養鱒場第一斐太養魚場がある。昭和七年五月起工、同九年五月二十日開場したもので、石灰岩の山から出る根方の大清水を利用するものである。

根方でも矢張り冬の運搬具として櫓が用ひられる。普通長さ六尺、幅三、四寸の木を以て作られ、用材としては楢の木または櫻の木が好まれる。(勿論子供が玩具に用ひるものにはホトバノキなども使用せられる。)カナグリ、フヂ(通すをカナグリと稱す)を着けて引く。

丹生川村と言つても相當廣いが、丹生川村の入口で聞いたことがらで、丹生川村のどの土地でとは判然としないことがらであるが、後の研究の參考になりさうなことの二三を此處に記して置き度い。

丹生川村の耕地と言へば田が主で畑は少ない。併し根方から奥は畑が多い。大體から言へ

ば米は足り、四斗俵百俵をとる家も少くはない。田の耕作には（また運送にも）牛馬を使役するが、下の方は馬が多く、奥の方は牛が多くなる。

板殿村から一里上つた八本原に縣營の牧場があり（八本原の地名は櫛の木が八本あるより起る、また牧場には柵を繞らす）年により馬が多かつたり牛が多かつたりするが、兩者合せて三〇〇頭くらゐのものが六月一日から十月の二十五、六日頃まで上る。（尤もそれは郡内の諸所から上るのであるが）馬の子は此の邊でも産れるが父馬は多くは巖手縣産で牛馬商が連れて來るのである。普通二、三歳で來り、六、七歳が盛りで二十二、三歳までゐるものが多い。母馬も南部邊から來る。木曾の山馬ヤマウマも來るがからだが小さく普通四尺くらゐで仕事も鈍い。唯、壽命は長く二十五乃至三十歳に達する。

山の方は炭の産地である。材木には赤松、ヒメコ（葉の細いもの）、ミヅメ、サハラなどがあり、また栗やブナは枕木となる。炭は四貫俵、

五貫俵で高山に出てそれから旅に出る。（他國に出ることを旅に出るといふ）

山の神は此の邊の村に多くある。神木があつて七五三を張り石（イハス）を祭る。祭は五月と九月とであるが、春祭りをすれば秋は祭をしない。正月は祭せず氏神さまに參るのみである。山の神の祭の日は山を休み山の神に海のもの、畑のものを上げ神酒や御饗を飾り、ネギが大祓をよみ、人々おさがりを戴く。山の神は荒神さまで以前木地屋が此の土地に入り氏神としたものを祭るのであると言ふ。今は木地屋は居ないが血統はある。

この邊でも雪袴をはき、雪袴の下には脚絆（きれにて作る）を穿く。かさとしては宮ガサが用ひられるがこれは一ノ宮で檜や一位の木をへいで作る。（手でへいで作つたものは高價である）

洗場としては水屋がありミヅヤと稱してゐる。

尙、霜は普通十一月半頃、雪は普通正月初め頃に来る。昨年(昭和八年)は雪は十二月廿五、六日頃から降つた。

二、小坂川の谷

次には益田郡小坂川の谷の一部を覗いて見る。

小坂では細い鋸をテ、ハ、ホ、といひまたナ、タ、はサ、ヤ、に入れ、運搬具としてはネ、コ、ダ、が用ひられてゐる。

十一月四日五日益田郡畜産組合主催、益田郡牛馬商組合後援牛馬市の掲示が見られる。

氏神は村社津島神社である。

長瀬では米は食ふだけにとれぬ。蕎麥や豆などを作つて若干それを補ふのである。蕎麥や豆もハ、サ、にかけて乾すが豆を乾すハ、サ、をマ、メ、ハ、サ、と言つてゐる。豆は此處でも植ゑるのである。即ち土地を薙一枚ばかりにシ、ハ、ク、ツ、テ置き(ならしして置き)豆を蒔きそれが一寸くらゐになつた時田の畦(ヅヅ)などに植ゑるのである。苗、ニ、ス、エ、

植、エ、ル、と言ふ。尙、豆の皮などのごみをア、ホ、ル、にイ、タ、ミ、を用ひるものがある。木の皮をコ、ツ、ラ、の細枝でしめたものである。尙、話が前後するが、泥田に入る時には此の地でもオ、ホ、ア、シ、を穿く。

養蠶は相當盛んであるが、桑には伊勢桑と奥州桑とがある。併し伊勢桑の方が奥州桑よりは多いと言ふ。自家用に家で糸を引きハ、タ、ゴ、で絹を織るものも多い。

長瀬では栗のスリッパ(枕木)を出す。炭は焼かぬ。炭は奥の方から出る黒炭(ク、ロ、ズ、イ)を買ふのである。

長瀬では馬を飼ふが、馬にはワ、ラ、ニ、ゴ、ク、サ、ガラ、ニ、ゴ、を與へる。ワ、ラ、ニ、ゴ、は草履や繩に用ひまたその儘で田の肥料ともするが馬にも與へ更にまた馬に踏ませてウ、マ、ヤ、ゴ、エ、(マ、ヤ、ゴ、エ、と發音する)ともするのである。ク、サ、ガラ、ニ、ゴ、はカ、リ、ボ、シ、とも稱し、馬に與へまた馬に踏ませてウ、マ、ヤ、ゴ、エ、とする。その草刈りのことをク、サ、ガラ、

カ、リともカ、リポ、シカ、リとも言ふ。厩はマ、ヤと言ふ。

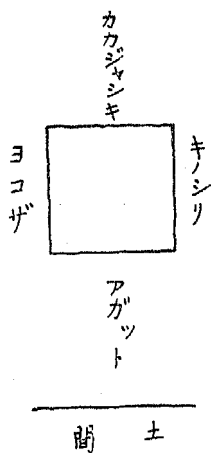
運搬具には色々のものがある。オ、ホ、カ、ゴは竹製圓形のもので腰に着け、ヒ、ゴも同様竹製で腰に着けるが形が小さい。ネ、コ、ダは藁で編んだもので背に負ふ。コ、ザは扁平形、竹製である。マ、ヤ、ゴ、エを運搬する大形の背板の如きものがあるがこれはコ、エ、モ、チと言ふ。背に荷を負ふ時には荷の下にミ、ノを當てる。また冬は櫛を用ひる。尙、雨の時はバ、ン、ド、リを着る。

洗場はミ、ツ、ヤと言ひ、四軒くらゐの仲間のものもある。顔を洗つたり炊事のもの洗つたりするところである。

物を容れるところにはモ、ノ、オ、キ、イ、タ、モ、ノ、オ、キ、イ、タ、グ、ラ、土藏がある。土藏は單にク、ラとも言ふが老人はヘ、イ、ツとも言ふ。ヘ、イ、ツの方が古い言葉であると村の人は言ふ。ク、ラに板倉と土藏とがあり、モ、ノ、オ、キ、イ、タ、モ、ノ、オ、キは廣義の板倉に屬すると解していいであらう。

爐邊に就いては、二階からカ、ギ、ツ、リを吊しテ、ツ、ビンなどを下げてゐるがアマは無い、イ、ル、リ、の席に就いては、主人の席をヨ、コ、ザと言ひその向つて左の女が座る席をカ、カ、ジ、ハ、シ、キと言ひ、向つて右の土間に近い方の客の座る席をア、ガ、ツ

第二圖



トと言ひ、正面の召使などの座る席をキ、ノ、シ、リと言ふ。即ち第二圖に示すが如くである。キノシリは薪木の尻の燻ぶる方が向けられるからの名であると言ふ。

氏神は長瀬神社、祭神宇迦之御魂神、普通に稻荷さんと言つてゐる。往昔古子に鎮座したのを宇森脇に遷したもので、社記に、寛政八丙辰九月建立の棟札があると云ふ。山の神はない。

古子^{フルコ}の山では炭を焼く。松原でも炭を焼きまた材木を出す。米は不足で六分しかとれぬ。麥を畑に植ゑて若干それを補ふのである。自家用の茶なども作つてゐる。

赤沼田^{アカヌマタ}では炭を焼くか、赤沼田木炭組合倉庫がある。また栗のスリツバを出す。

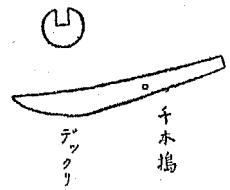
赤沼田の少しく上流の河成段丘上に小規模の棚を有する牧場がある。

運搬具では檜の皮で作つたネコダが珍らしく、また收穫時稻の落穂などを入れる籠をヒゴと言つてゐる。

氏神は神明神社。

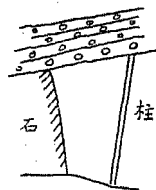
深作では米を搗くのにデックリによつてゐる。此の川筋には水車は少い。デックリは、丸太を刳つた筧に導かれた水と同じく丸太を刳つた筧に受け水の重量でそれがデックリカヘシする故デックリと言ふのであり、(第三圖はこれを圖式的に示す)これで米を搗くのを千本搗^{センボンヅキ}と言ひ、その場所をツキヤと言ふ。また動力に清水を用

第三圖



ひるのでその道具全體をハコウズとも言ふ。壺は石で作られてゐる。これは全く前述の小八賀川の谷で見たバッテリー式のツキヤに當るものであるが

第四圖



此處には、地上に露出した大きな岩を片方の壁に利用した野外の板葺小屋ガケ式の原始的なものなど見られる。(第四圖参照)尤も製米に電氣を使用してゐるものなども無いではない。

深作では舊式のスミガ^{クロズミ}で黒炭^{クロズミ}を焼く。この邊では黒炭を焼くのであるが奥では白炭をも焼くらしく上流からそれを荷馬車で運んで出るものを見る。また深作には御料林の雜木(栗ではない)の排下げられたものを運搬する(小坂に出す)ものもある。因みに荷を負ふ繩を深作ではニナハと言つてゐる。

落合には石丸鐵工所といふのが一軒ある。これは實際は農具製造修繕の鍛冶屋なのであるがこの家が落合、即ち大洞川の谷と濁河川（ニゴリ川）の谷との合流點近くに立地してゐることは大いに意義のあることである。落合ではまた御料林の雜木（枕木用）を川で流して來たものを拾ひ上げそれをトラックで小坂に運び出してゐる。尙、大洞川の谷には今木材搬出用の輕便鐵道がつけられてゐる。

湯屋ではごみを石の竈で焼きその灰を肥料として田に入れ、また山の斜面の草を刈つて肥料としてゐる。

畑に出来るアブラ、エ（アブラ、ギ）を田の面などに乾してゐるが、これからは油を搾り、油は主に食用に、また燈油にも使用し、そのカはエノカラと稱して畑に入れ肥料となし、また實をそのまま炒つて臼で搗き薯（ジャガタラ薯）や餅などに着けて食つたりする。（薯は串にさして焼くのである）

田の耕作や運搬用には馬を使役するが、馬は奥州並びに木曾から來る。普通五、六歳で博勞が連れ來、一生居る。木曾馬の方はからだは小さいが種はよいと土地の人達は言ふ。運搬では材木の搬出が最も重要で、筆者はモミなどの材木を馬車で小坂まで出すのを見た。

湯屋には帝國林野局名古屋支局小坂出張所湯屋分擔區員駐在所といふのがある。（南落合には同南落合分擔區員駐在所がある）此の邊が林産上重要な地域であることが知られる。

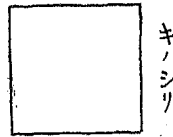
湯屋では人々カルサンを穿きまたソ、デナシを着るものが少くない。尤も湯屋でもカルサンの代りに雪袴を穿くものもないではない。カルサンは九寸巾を五巾にしたもので膝から上にヒダがあり、雪袴は膝より下に長いものである。雪袴は信州に多く飛驒でも大野の衆に多く用ひられると言ふ。

圍爐裡に關しては、主人の席はヨ、コザであり、その席へは女は勿論家内でも上らずまた客をも

上らせない。それに關聯して昔から高野山と立山と横座とは女は絶對に上れないと言はれ、また餘り勝手なことを言ふ人を俗に横座辨慶と言ふ。ヨコザから向つて左の棚などのある方の席をハハジハシキと言ひ家内はそこに座る。ヨコザの正面の席はキノシリと言ひ下男下女などの奉公人の席である。薪の尻に當る故キノシリ

圖 五

ハハジハシキ



ヨコザ

キノシリ

ヒトザシキ

ヒトジャシキ

間

土

と稱する。ヨコザの向つて右側即ち土間に近い方の席をキハクザシキともヒトザシキ(ヒトジ

圖 六



ハシキ)とも稱する(第五圖參照)。爐の中央には三本足の五徳を置き上にチャガマを乗せる。ツシ(二階)からカギツルでオホカギ(木製)を吊り(第六圖)それから繩を下げてそれに木製の自在を着けるのが古式である。今はオホカギだけが無用のままに下りそれから繩も下けず自在も着けずチャガマが五徳の上に乗せられてゐるのが多い。アマも見られない。

湯屋には村社富士神社と別に秋葉神社があり寺では醫王山の小堂に薬師如來を祀つてゐる。これは濁河と同様冷泉ではあるが湯屋に涌く鑛泉と關係のあるものであることは明かである。

(昭和十年二月一日午前二時半)